



妙の光

通刊56号 復刊35号
2001年10月23日(季刊)
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025



栗

境内に続く山の斜面に植えた栗の木が、今年初めで実をつけた。二十本余りの木にしては大した量ではなかつたが、大きくて甘味のある栗だった。

平成五年の春、新潟市の遠藤茂五郎さんがトラック三台もの各種の苗木を奉納されたなかに、この栗の木があつた。それを角田浜の横沢保さんらが植え、さらに毎年草刈りを続けるなどして育ててくれた。それが海からの風が強く当たる条件の悪い地形のせいか、八年目にしてようやく実ったのだ。

しかしその横沢さんは三年前に、遠藤さんも今年の春他界されてしまった。初栗をそれぞれのお宅に届け、仏前にお供えしていただいた。この先毎年の栗を食べるたびに、お二人を思い出すことだろう。もっとたくさん実るようになつたら、寺の行事に栗拾いを加えたら楽しかろう、とも考えた。

ダライラマ謁見の旅

小川英爾

「小川さん、とてもいい話があります。KBSテレビの番組で、インドに行つてダライラマと対談することになりそうだから、そのときはあなたもぜひ一緒に行きましょう」。韓国ソウル大学の沈先生からお誘いいただいたのが今年の春だつた。ソウル大学で学ぶチベット仏教僧に、妙光寺が奨学金制度を設けていることからのお話だつた。

チベットは中国領内にあるが、歴代のダライラマが法王として仏教で治めてきた平和な地だつた。そこに中国政府が「チベット人民を封建制度から開放する」を口実に、武力で侵攻し共産主義を押しつけた。やむなく現ダライラマ十四世はインドに亡命し、北の街ダラムサラに亡命政権をたて、多數の避難民とともに望郷の念を抱きつつ暮らしている。以来六十年余りが経つが、仏教徒として戦争によらない平和的な解決をずっと主張し、その指導者としてダライラマが先頃ノーベル平和賞に選ばれたことはご存じかと思う。

KBSは日本ではNHKにあたる放送局で、来年のワールドカップサッカーにからめて世界のトップリーダーのインタビュー番組を製作中とのこと。その担当者一人と沈先生、さらにソウル大学の講師と大学院生に私が



加わり、総勢六人が九月二十三日インドに向つた。

翌日の午後、沈先生とKBSのスタッフは飛行機で先発、私ら三人は現地調達の撮影機材にインド人スタッフ三人と運転手、小さなジープにすし詰めてニューデリーを出発した。六百キロ十時間の道のりと聞くが、予想通り十三時間かかって午前二時によくやくたどり着いた。絶対に譲りあわない大渋滞のデリー市内、高速道路並の国道は百二十キロからのスピードを出すが、時折逆走行してくる車があつてスリル満点。後半は未舗装の山路で、さらにパンクのおまけまでついて暗やみのなかライターの明かりでタイヤ交換するなど、道中はインドそのものだった。

暑いインドでもここはヒマラヤに続く山の中腹で標高千七百メートル、眺望も良く気温三十五度でも乾燥してとても爽快。冬は時に雪が積もるという。急峻な傾斜地に世界中から集まる人目当てのホテル、土産物屋、レストラン、電話屋、等々の小さな店がへばり付くように建ち、やや大きな村という感じ。道にはチベット人はもとより旅行者や頭を丸めて僧侶の姿をした西洋人、さらに牛まで交じつてひしめいていた。それでもサラリとして居心地のいいのは気候のせいばかりでなく、チベット人の穏やかな気質のせいだと思う。丸五日滞在したが食事も美味しく、ヒマラヤ杉に囲まれた緑豊かな環境もあって帰るのを忘れるほどだった。しかしいまだに中国の圧政から命からがら亡命してくる人が絶えないという現実もあった。

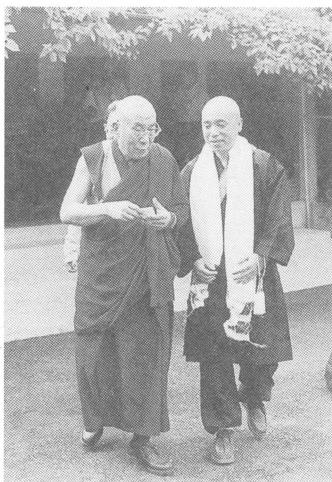
到着した日の午後、明日の打ち合わせにダライラマ公邸を訪ね、夜はテレビ取材ということで、チベット伝統芸能研究所ホールの唄と踊りに招待された。そして当日、二十畳ほどの質素な応接室に撮影用ライトが並び、カメラが二台、室外には各種機材が積み上げられテストが続く。部屋の中央にダライラマとインタビューの沈先生の椅子、そしてやや離れた位置に私たち三人の椅子も用意された。予定の一時に十分前、ダライラマが右手を挙げて「ヤア」という感じで入つて来られた。六十六才で大柄な体型。

席に着くなり周囲を見回し、法衣姿の私を見て「彼は坊さんか?」と尋ねられたので沈先生が私を紹介してくださった。

簡単な打ち合わせの後、英語でインタビューが始まった。沈先生は毎年アメリカの大学で仏教を講義されており、ダライラマも英国人家庭教師について英語を学ばれたと何かで読んだ。日本語しかダメな私には質問内容だけがなんとなく想像講義できる程度で、会話の内容はまったく理解できない。当初この旅は同じソウル大の李先生と奥様の宋さん、それに妻のなぎさも同行の計画だった。日本語の堪能な李先生夫妻の通訳をあてにしていたのだ。それがアメリカのテロ事件で、止むなく私だけの参加にしたからこんなことになってしまった。(後日録音とビデオで内容を理解するので、改めてご報告します)

予定の一時間過ぎてもインタビューは続いた。沈先生が「最後の質問」と切り出しが、ダライラマの答えが大変興味深いからまた質問が続き、また熱心に答える。秘書官がイライラして立ち上がり、沈先生が「最後の質問」と言つた。「これで四回目の最後の質問だよ、だいたいあなたの質問は難しいことばかりだ。イエス・ノーで答えられるのなら簡単でいいのに」とダライラマが笑いながらまた一所懸命答える。終わつた時には一時間半が経過していた。

引き続いて沈先生が最初に私を改めて紹介した。私はカタと呼ぶ絹のスカーフをダライラマに差し上げ、お返しに別のカタを首に掛けていただいた。チベットの貴人に会う際の習慣という。握手したが、ダライラマの手は大きくほどほどに柔らかく暖かかった。他の人たちも一様に行なつてから、一緒に写真をというこちらの申し出に「外のほうが写りが良いからそつちに行こう」と私を導いてくださる誠に気さくなお

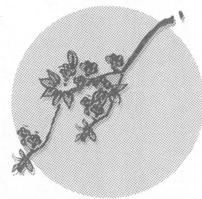


人柄。チベット仏教の信者にとつては觀音様の生れ変わりで、会つた人は生涯の幸福を保障されると認められるダライラマ。確かに人を引きつけてやまない魅力十分だが、これまでのつらい過去と今置かれている状況を思うとき、その深い苦悩も感じないではいられなかつた。

できれば私もお尋ねしたいことがいくつかあつた。人間の死と輪廻転生を現実にどう考えておられるか、世界の武力衝突の現実と仏教の関わり、世俗化の進む宗教、ことに仏教の今後をどう考えたらいいのか、チベットに帰れる可能性と中国に対する今のお気持ち、そして次の代のダライラマはどうなるのか。残念ながら言葉の壁と時間切れはどうにもならない。ただ沈先生の質問に似通つた点もあつたので、翻訳を楽しみにする。一同多いに充実した思いで公邸を後にした。

翌日から亡命政府、伝統医学研究所等々を訪ね、ときにはヒマラヤの眺望を眺めに山に登るなどして過ごし、五日目にダラムサラを発つてパタンコットなる町から夜行寝台列車でニューデリーに戻つた。タージマハールに行くという一行とここで別れ、私はガンジス河の沐浴で知られるバナラシにひとり向かつた。しかしテロ事件の余波でなんとなく騒然としており、さらにインド国内でもテロが起きたとのニュースに、沐浴見学とサルナートの仏跡参拝だけして、予定を切り上げ早々に帰国の途についた。

アメリカによるアフガニスタン攻撃開始の報道にいま接している。テロは決して許されるべきではないが、テロの背景にある世界の経済格差、長い歴史の宗教対立、軍事攻撃の有効性への疑問と新たな犠牲者の発生、これらを考えたとき、武力攻撃は眞の問題解決には程遠いと思わざるを得ない。ダライラマは平和的解決を祈つていると言われた。そして自ら受けた中国の軍事攻撃に対して、途切れることなく「対話しよう」と訴え続けている。これが仏教者の姿勢だと、身に染みて受けとめている。



ソウル大学関係者と住職



ヒマラヤにあたる夕日



ダラムサラの町並み



チベットの踊り



岩間猊下のご遷化



総本山身延山久遠寺の前法主で元日蓮宗管長の岩間日勇猊下が、九月十七日九十三歳をもつてご遷化（せんげ・僧侶の死亡）をいいます）された。

岩間猊下は妙光寺の先代住職と学生時代から一番の親友で、先代亡き後は妙光寺のことをずっとご心配いただいた。行事には必ず導師をお勤めいただき、身

延山に団体参拝したときには待つていてくださり、種々配慮してくださるなど、檀家の皆さんも大変馴染みが深い。

十五年程前にある日「俺だおれだ。

今近くの岩室温泉にいるんだが、明日親父（先代）の墓参りに行くぞ」と電話があつた。身延山の法主という大変な要職に就かれた直後で、そう簡単にはお出かけになれないお立場なのでこちらが慌てた。昼食をはさんでゆっくりしていただいたが、先代の墓前を去ると、最後のお姿から「もう来れないよ」と、なつたことが感じとれた。このとき「安穩廟」の中央に刻むお題目の文字をお願いしたのだつた。

「終戦の年、その挫折感で呆然自失した私はたまらなく彼に会いたく

なり、窓ガラスは割れ、座席は剥がされたゴトゴト列車を乗り継いで角田を訪れたことが忘れられない。何の用があつたわけではないが、この傷心の極みに会いたくて会いたくてならない人こそ、本当に心許しあつた眞実の友であつたと思う」。先代の七回忌のおり、思い出に寄せていただいた一節である。

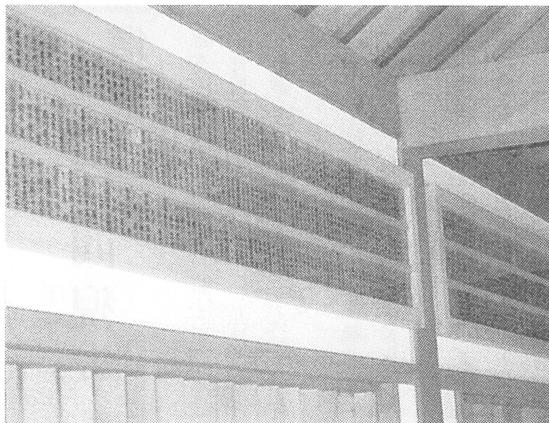
宗門内でも誠実で温和、包容力のある人柄と、その情感こもつた分かり易い語りで、「説教の岩間」として知られていた。布教の第一人者として終生を身延山に捧げ、ここを「布教のお山」に育て上げられた功績で、第一回日蓮宗總合財團賞を受けられた。

一昨年体調不良でお勤めできないと、終身制の身延山法主を異例の退任され静養させていた。遷化の当日、久しうぶりにと日蓮聖人の御廟所を参拝、歴代法主のお墓、本堂を回り、門前町を懐かしそうに車中から眺めて自室に戻られた。まもなく急に気分を悪くされ、午後六時静かに仏様のもとに旅立たれた。

本堂工事 その他

本堂工事関係のお知らせ

本堂工事は支払いを完了し、現在不



足金二千万円を第四銀行から借り入れています。これは五年分割の方の残金と、都合が着かなくて入金が遅れている方の分です。百%完納されると過不足なしになる見通しです。年末までには未納金を集計して、個々にご連絡します。全体の中間集計は、日々変化しますので来春お知らせします。

寄付奉納者のお名前を回廊に掲示しました。金額は入れず、五万円以上で地区別五十音順です。文字の間違いや追加もありますので、当分仮止めにします。ご不審の点はお申し出ください。

一年かかった工事の記録ビデオを製作中ですが、撮影した量が多くて編集に手間取っています。完成が年末までかかるかも知れません。お申し込みの方には

足金二千万円を第四銀行から借り入れています。これは五年分割の方の残金と、都合が着かなくて入金が遅れている方の分です。百%完納されると過不足なしになる見通しです。年末までには未納金を集計して、個々にご連絡します。全体の中間集計は、日々変化しますので来春お知らせします。

寄付奉納者のお名前を回廊に掲示しました。金額は入れず、五万円以上で地区別五十音順です。文字の間違いや追加もありますので、当分仮止めにします。ご不審の点はお申し出ください。

一年かかった工事の記録ビデオを製作中ですが、撮影した量が多くて編集に手間取っています。完成が年末までかかるかも知れません。お申し込みの方には



防犯設備

世相を反映してか、妙光寺でもここ数年盗難被害が多発しています。賽銭箱二回、奉納米、岩屋の仏像等々。そこで新本堂には夜間の警報装置を設置しました。カメラは夜間に防犯カメラ、日中は行事のときなど進行を確認するモニター。カメラとして効果的で、これまで被害はありませんでした。

ところが九月末の日中、カメラのない祖師堂の賽銭箱を開けている泥棒を鎌田が見つけ、高齢の男だったので追いかけて捕まえました。なんと、十数年前ユースホステルとして人を泊めていたころ二度宿泊したそうで、住職が拳動不審な人間としてよく覚えていた県外の男でした。

これまでも、不在か否かを確認するかのような不審な電話、誤作動とは思え

恐縮ですが、お待ちください。希望される方はまだ申し込み可能です。一本三千円（送料五百円）

ない深夜の警報装置作動等があり、油断ができません。

平日でもお参りの方が増えていますので、防犯を理由に門を閉めることも無理です。大変残念なことですが、カメラを増やすなど業者と相談して対策を抗じていきます。

夏の写真展

『和・顔・施』と題した写真展に、八月のお盆過ぎ一週間本堂前の回廊をお貸しました。新聞やラジオで紹介され

たこともあって、大変な人出でした。新潟市で写真館を経営する増井伸一さんは安穏会員の娘夫婦で、長年撮影したお客様の肖像写真五十点余りを、ぜひ妙光寺で展示したいとのお申し出でした。交通の便が悪いので心配でしたが、猛暑のなか平均して客足の途切れることがなく、最終日には続々と詰めかける盛況でした。

檀家や近所の方が「うちの孫を撮つてもらったから」と、けつこう見に来ていたのには驚きました。また「写真も良いかったけどお寺がすばらしいので、別の友達誘つてこれで三回来ました」なんて人も。



しました。

今後も原則実費負担いたぐだけでお貸したいと思います。どなたでもご相談ください。これまでに生花や陶芸の展示のお話がきいています。



また二日目の夕方、板張りの院庭でチエロが生演奏され、夕日に赤く染まつた西の空と、涼しくなつた夕方の風、カナカナカナと鳴くヒグラシの声を、集まつた百人余りの人たちが堪能

ムササビとモモンガはどう違う？

県立巻高校教諭 藤田久

境内に生息するムササビのことを、

目が大きく可愛らしい小動物です。

県内各地では“バンドリ”とか“モモンガ”と呼んでいます。「晩鳥」と書け

ば前者の方は納得いただけるでしょう。

日没と同時に滑空を開始する夜行性動物

なので、薄暗い中で鳥に見間違えたのは無理もありません。

モモンガの方は、別属別種に夜行性で滑空するリスの仲間が実際に生息するので話しは少しややこしくなります。これは本物のモモンガで、ムササビより二

周り体長が小さく、20cm程の大きさしかありません。近頃、ペットショップで「アメリカモモンガ」が販売されていますので、ご覧になつた人もあるでしよう。

『動物名の由来』と著した中村浩によるとムササビの古名は「モミ」といい、「毛美」と書いて毛皮の美しさを指すのだそうです。さらに、これが転じて「モモ」になり、そして「モモンガア」に変化したという。つまり夜にガゲアガゲアと気味の悪い鳴き声を連発するから「モモンガ」だというわけです。

そこで実際、この声の種類からして声の主は里に生息するムササビのようと思えるのです。ギュルルル、グアーグアーというような甲高い気味の悪い声は、

長野県のある地方では、「言うことをきかないとモモンガが出るぞ」と子供だましの言い方が現在も使われています。このモモンガは「妖怪」や「毛深い化物」として登場します。着物や風呂敷を頭からかぶり、ひじを張つて広げ、ふざけて子供を脅かしたり、なだめすかしたりする遊びを子供の頃に体験したことはない

妙光寺の周辺においてもよく耳にするお馴染みの鳴き声なのです。

ではモモンガはどこに生息するのでしょうか。もともとモモンガは北方系の動物で、北海道にはエゾモモンガ、本州にはホンシユウモモンガが標高の高い地域

の森林にくらしています。長野県八ヶ岳連峰の夏沢峠には、窓越しにモモンガを観察できる山小屋があります。新潟県内

は北アルプス登山口・蓮華温泉や津南町の秋山郷に生息すると聞いたことがあるくらいで身近な里の動物とはいえないのです。





五味川 秋 男氏 撮影 提供 自然情報センター

「夜行の人の炬松かかげて、これを消し、その烟火をふく。よつて妖怪なりと、人これをおそる」

夜道を行く人の炬松めがけて襲いかかり、その火煙を食べてしまう妖怪に「モモンガ」がまつりあげられたのは無理もありません。照明の手段が炬松や提灯だった時代のこと、暗闇を滑空する動物が背後に迫ったときは妖怪の突如の出現で、その正体はムササビかモモモンガの識別どころの話しだはなかつたはずです。

○ ○ ○ ○

場します。

万葉集にはムササビが登

江戸時代の『本朝世事綺談』にはこんな情景が描かれています。

丈夫の高圓山に攻めたれば

す。

この歌が読まれたいきさつが、次のように述べられています。

天皇が高円野で狩りをされたとき、小さな獸が都に逃げ込んだ。このとき勇士にぶつかって生け捕りにされたので、この獸を天皇の所へ差し上げるときに、この歌を添えて行くつもりだつた。けれども獸が死んでしまい歌を差し上げることもやめたとあります。

つまりムササビやモモンガは夜行性のため昏闇はめつたに姿を見せないから実際に生きた姿を知る人は、あまりいなかつたはずです。ですから天皇に献上するくらい珍しい獸だったのでしょうか。

もうおわかりでしょうか。当時はムササビとモモンガの区別をしないで同じ動物として扱われていたのです。しかし実際に見ていたのはモモンガではなく里に生息するムササビだったわけです。

里に下りれる牟射佐妣ぞこれ
大伴坂上郎女

フェスティバル報告 その他

八月二十五日、夏の「フェスティバル 安穩」が賑わいました。今年は新本堂完成記念としてお祭りムードと、これから妙光寺を考えるを主題にして、天候にも恵まれ二百五〇人以上の方が参加されました。

・パネルトーク

「いま寺からのメッセージ」をテーマに、葬送ジャーナリストの碑文谷創さんが司会、秋田光彦（大阪・應典院住職、淨土宗）高橋卓志（長野・神宮寺住職、臨済宗）草野栄應（東京・明治寺住職、真言宗）の各師をパネリストに、そして N.H.K の解説でおなじみの村田幸子さんをゲストコメンテーターにとそろそろたる顔ぶれでした。

皆さん話のプロばかりですから、それぞれの寺の取り組みを楽しく語り、会場は爆笑の連続。これからのお寺のありかたを考え、妙光寺の方向性を指示示す場になりました。

そして急きよ

決まった新企画。

それぞれの住職の奥様たちが偶然参加されたのを機に、

壇上に上



・安穏法会

昨年が本堂工事との兼ね合いで準備不足の法要でした。ことしは暑さを避け、ロウソクの明かりがより効果的になるよう、時間をギリギリ遅くしました。音楽も旭川在住のプロ、佐々木義生さんが才

がって寺での生活の日常を語りました。これには日頃りっぱなことを口にする住職も真つ青。でも弁明の機会を与えてどうにか丸く収まつた次第。（全体の詳しい内容を印刷物にしてお送りできるか検討中です）

がって寺での生活の日常を語りました。これには日頃りっぱなことを口にする住

職も真つ青。でも弁明の機

会を与えてどうにか丸く収まつた次第。（全体の詳しい内容を印刷物にしてお送りできるか検討中です）

・交歓会

フェステイバル安穏は全国的に知られるようになり、今年はテーマに関心を持つ各地で“生前契約を”考えている市民団体が多数集まりました。そこで翌日の午前中、情報交歓の場を用意して交流しました。安穏が全国の新しい葬送や、寺の活動を促すきっかけを作っているといえます。

・ビデオ作成しました

今回の模様をビデオで十五分にまとめました。希望者にはすぐにお分けできます。一本千円(送料五百円)お申し込みください。

・スタッフとは

フェステイバルでは数カ月前からテーマやゲストを決め、当日は進行を担当するのが主に県外の協力スタッフです。研究者やジャーナリスト、住職の後輩僧侶などが中心です、そして当日の法要会場を設営したり、送迎、パーティの料理

を担当するのが地元檀家スタッフ。さらに直前の準備や当日の受付、会計、事務

作業一切を担うのが事務局で、これは安穏会員が現在五名で担当しています。この他にも音楽、放送設備、架設トイレ設置や駐車場整理等々の担当する協力者まで、大勢の人たちの力で成り立っています。

・会計報告

収入は安穏基金から二百万、ロウソク献灯七十万、参加費三十五万の計三〇五万円。支出がゲストの謝礼、スタッフも含めた宿泊費、交通費、会場の飲食費が各四十万、その他設営経費、花、ローソク代金、印刷事務費等々総額で三〇五万円で、ピッタリでした。会計係は小田さん三箇さんと統一して今年から木内さんになりましたが、いずれも安穏会員です。

・参加者は

今年は対外的な告知は控えたので心配しましたが、それでも総勢一百五十人を超えました。当日の受付名簿で会員の

方の参加が確実に増えていることがわかりました。

安穏廟最後の四基目が満杯で、受付を停止しています。しかし八月のフェスティバルが新潟日報紙上で大きく報道されたことで問い合わせが続いています。それと会員の紹介という、誠にありがとうございます。

そこで五基目の計画については今後協議するのでなんとも言えません。それでも希望される方には連絡先をお聞かきして、決まり次第お知らせすると

いうお答えをしています。



瑠璃（ラピス・ラズリ）

小川 なぎさ



土産の話をします。

安穏廟も売れ切れ、本堂工事も終わり、気分的によく一段落して秋を迎えた。楽しみにしていたインド旅行がアメリカのテロ事件で中止になり、本当に自分でも驚く程落ち込んでしまいました。完全に立ち直るのに二週間はかかってたかも知れません。

それでも、世界中が混乱していることを思えば普段の生活を送つてもらいたい。この一連の報道を毎日見つめています。娘たちともいろいろなことを話し合うよい機会だとも思い、平和について、戦争について、報復ということの意味、政府の対応、話ながら自分でも考えることばかりです。

インドから無事にかえった住職のお

中国を恨んではいない。とダライ・ラマはその自伝で述べています。住職がダライ・ラマに会いに行つて、アフガニスタンの石を買つてきました。このことは私の心に深くしづみました。

テロは卑劣な行為です。でもチベット人の選択のように、あるいは歴史のなかで弾圧された仏教徒が歩んだ道を思うとき、もう少し冷静で思慮ぶかい対応はなかつたものかと残念でなりません。

報復攻撃にも日本のアメリカ支援もどうもしつくりきません。いまほど自分が仏教的な価値観をもつていたことを強く意識したことはありません。そして大切にしようと思ったことも。

私は宝石には全く縁のない生活をおくっているのですが、かなり以前から「瑠璃」という石に興味がありました。ラピス・ラズリの和名が瑠璃です。この石の主産地はアフガニスタンです。仏教徒にとって、平常心を保ち邪心を取り除く力を持つといわれているそうです。そのことを知つてから、深い青空を思わずそのままその石をいつかは買いたいと思つていました。

このことは住職に話したこともなくつたし、忘れていたのですが、お土産にこのラピス・ラズリを買ってってくれたのです。

国を追われたチベットの人たちは、



行事案内



お会式(おえしき)のご案内

引安五年(一二一八二)十月十三日にご入滅された日蓮聖人の、第七百二十一回忌にあたる法要(お会式といいます)を左記のように営みます。

併せて今年は、かつて漫才で一世を風靡された「獅子てんや」さんをお招きしました。獅子さんは十一才で父親の死に遭い、その後家族も離散して他人の世話でここまでこられたといいます。相方の瀬戸わんやさんが亡くなられてからは、一人芸として国立演芸場他で演じておられ、このたびは「出会いこそ人生」と題してのお話です。

ご都合によつては午後からでもかまいません。どなたも気軽においでください。

・日時　十一月二日(金)午前十一時—法要　十二時—おとぎ　一時—講演

・会費　一人　三千円(含おとぎ料)　午後からの方は千円　当日受付で

・申込　おとぎ準備の都合上、十月三十日までに各地区世話人か、直接妙光寺へ電話でお知らせください。午後から出席の場合は申込不要です。

※来年度の岩屋七面宮のぼり旗、奉納受付中です(一本一千円)。
※日蓮宗新聞を購読の方は切り替えですので、代金三千六百円お願いします。

あ
・
と
・
が
・
き



お彼岸前の発行予定が遅れました。
お知らせしたいことがいっぱいで、まとまらなかつたせいです。これを機会にこの寺報ももうひとまわり大きな判にして、文字も大きくしようかと悩みました。

文字を大きくすることはずつと考えていることですが如何でしょう。
しかし問題は判を大きくすると話題が少ないと困るので、郵送の際袋に入れる作業手間、封筒と送料の経費増です。個人的には小ぶりな今の形が好きなんですが。ご意見をお聞かせください。

秋の夜長、騒然とした世の中ですが、せめて心だけでも落ち着かせて過ごしたいと思つています。

小川